



Title	モンゴル小周遊記
Author(s)	曾, 芳子
Citation	モンゴル研究. 2025, 34, p. 51-57
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103478
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《雑 感》

モンゴル小周遊記

曾 芳 子

はじめに

2025年8月、私は生まれて初めてモンゴルの地に足を踏み入れた。二十歳そこそこの若輩の身では知らぬことなど溢れるほどあるが、モンゴルについても同様に、ただその音の響きを知るだけだった。モンゴルに行くことを志したきっかけは、2024年まで遡る。大学一年生の後期、今岡良子先生が開講する「遊牧民の文化と社会を知る」という講義の授業項目で掲げられた『四季 遊牧 1982 ツェルゲルの人々』と冠したドキュメンタリー映画のタイトルに惹かれて、受講したのが始まりだった。それまでは遊牧民の暮らしについて茫漠とした印象をとどめるに過ぎなかった私に、映画に登場するツェルゲル村の人々は、次から次へと鮮烈なイメージを与えた。彼らはネグデルから独立し、共同体を立ち上げ、そして学校までも自らの力で設立したのである。それは新しい社会の無からの創造に他ならない。これは、よほどの「生きる力」がなければ、成しえないことである。既存のレールに取り囲まれてきた私に、彼らの姿は、「生きるとはどういうことか」「豊かさとは何か」、という根源的な問いを突きつけてきた。厳しくも雄大な自然に抱かれて、新しい生き方を模索した彼らの足跡をたどりたい。この衝動に駆り立てられるまま、今岡先生に連絡を入れ、その半年後の2025年8月13日、私はついにモンゴルへ旅立つこととなったのである。

これは、映画を通して受け取ったツェルゲルの過去、そしてモンゴルの現在に思い馳せながら経験した数々の邂逅と、悠遠なる大自然とへの感懷を述べた回顧録である。

■ 首都ウランバートルへ：8月13日～8月16日

この旅は、今岡先生のフィールドワークに私が同行させてもらおうといった形の2人道中であり、ウランバートルを始点とする。

そこでお世話になったのは、ザヤさんとツェネさん、そして2人の娘であるアズザヤーちゃん。一家に連れられてウランバートルの観光地とその近郊を訪れたが、やはり私を圧倒したのは、街や人工物を囲む自然風景である。下側には濃い緑と赤茶の地が続き、視界の殆どを覆う蒼穹に白雲が悠々と流れる。ピクニックをするために郊外に車を走らせ、遠くに荘重な山々をたたえた風光明媚な草原の上に降り立つと、自然の雄大さというものが、確固たる質量をもって迫ってきた。遙か遠方に人工物がボツネンと佇んでいるが、大地のもつ威容に今にも飲み込まれそうである。

この大地を見ていると、自らが行動して生き抜こうとしないと生きていけないのではないか。そう伝えると、ザヤさんはその通りだと澁みなく答えた。生きること、生き方、生活そのものが学びだ、と。

自分の生活を思い返す。私の暮らしは、人間が作り出したもので埋め尽くされている。いわゆる文明の利器と生活システムを利用し、それに則って歩みを進めていく。利便性が極まっているから、必然的にあらゆるものが効率化されて、行うタスクも増える。無駄がなくて充実した生活だと言う人もいるかも知れない。だが、考える暇がない。今この瞬間は、「次へ進む」ためのステップであり、それが終わるとまた更なるステップへの準備が始まる。ライフステージという言葉がそれをよく表しているだろう。生活そのものを省みる時間は、今のところない。そして、自ら行動することよりも、既存の選択肢の中でいかに自分が上手くやっていけるのかを考えるようになる。私は日々の生活から何を学び得ているのだろうか。果たして私は人生を生きているのであろうか。それとも、充実しているように見せかけて、ただ消費しているだけなのだろうか。

そういったことを取り留めもなく考えながら、ウランバートルを取り囲む自然の雄大さに感動したことを伝えた。すると、ここはまだまだ観光地で本当の自然じゃないよ、と笑われてしまった。少しの気恥ずかしさと共に、これから向かうバヤンホンゴルの大自然へと期待が高まる。

■ バヤンホンゴル県ボグド郡：8月16日～8月17日

朝8時、ムンフバドさん(映画の登場人物である前郡長さんの息子さん)の車に乗り込み、遙か先、バヤンホンゴル県ボグド郡へと向かう。車窓を流れる景色は、刻一刻とその姿を変えていく。目に染みるほど深い青空のもと広がる平坦な大地に、その上を僅かに彩る緑と菜の花の黄色。大石が寄り集まったような形をした岩が点在する場所を通り抜け、車は段々と高度を上げていく。ついに標高2000メートルを超えると、ぐんと空に近づき、天空が大地に迫り来るような錯覚を覚えた。中国の諺に、「杞憂」という言葉がある。中国古代の杞の人が、天が崩れ落ちてきはないかと心配をしたことから、する必要のない心配をすることを指す。だが、所は違えど、その人物が味わった感覚を今まさに味わっているようだった。時刻が夕暮れ時に近づくにつれ、薄鈍色の雲から黄金の光が差し込み、天使の梯子を型どる。自然の雄偉への畏怖と尊崇の念が湧き上がると同時に、大きな虚脱感のようなものが込み上げてきた。この広漠な大地の中にもし独り取り残されたら、自分は生きていけるだろうか。恐らく、いや間違いなく不可能だろう。そもそも自然と自分自身との規模の違いに当てられて、少し自分を見失いそうになる。

自分が今まで考えてきたこと、積み上げてきたと思ってきたもの、それらは一陣の自然の息吹のうちに吹き飛ばされてしまいそうだ。圧倒的な威力をもつ天地に軽い目眩を覚えながら進み続け、ウランバートルから約11時間、とうとうバヤンホンゴル県ボグド郡中心部へ到着した。そこでは、映画に登場したドラムドルジ前郡長さんとヨンドンダシさんが出迎えてくれ、お二人の娘さんの家に1日の間だけ宿泊させてもらった。

翌朝、ドラムドルジさんが宿泊場所にやってきて、これから郡中心部の案内をしてくれると言った。恥ずかしながら、私はモンゴル語を理解し話すことはほとんどできない身であった。(道中は常に今岡先生に通訳していただいた)それでも、そんな私のすぐ側に腰掛けて、今から色々見せてあげようと語りかけてくれたドラムドルジさんの物腰柔らかな姿に、思わずほのかな嬉しさが込み上げてきた。ムンフバドさんの運転する車に再び乗り込み、映画に出てきた郡の様子を見て回る。学校や病院、その他の公共施設などなど。映画では見られなかった中心地の細部が、自分の記憶する映像を補完す

るようにくっきりと形を成していく。

郡中心地に滞在するも束の間、今度は別のご家族の所へ向かう。出発前、ドラムドルジさんに名前を尋ねられた。今岡先生が記してくれたモンゴル語の私の名前をじっくり眺め、その発音を何度か確かめると、おもむろにこう述べた。「千人の顔を覚えるよりも、一人の名前を覚えなさい」と。それがどのような真意をもつのかは分からない。それでも、この雄大な自然を生き抜く中で学び得た、生き方についての教えだと思った。大学には、さまざまなきっかけで知り合った知人が多数存在する。大学以外でも、あらゆる場面で多くの人と出会い、顔見知りになる人間は増えるばかりである。それでも、私がその名前を迷うことなく挙げることができる人は、その中の幾人ほどであろうか。もし私が相手の名前をしっかりと覚えていたら、きっとその人も私のことを記憶してこの名を呼んでくれるだろう。名前を覚えることは、人と人の結びつきを深くするのではないか。当たり前なことだが、日常を過ごすうちに見失っていた気がする。モンゴルでは、～さんのところの〇〇さん、という語り方をよく耳にした。これは家系と名の記憶であって、その人のルーツの保存を意味するのではないか。この中心部に来る道中で、自然に圧倒されて、自分自身を見失いそうになったと述懐した。しかし、私がある人の名前を覚えて、そしてその人が私の名を記憶して呼んでくれるのならば、少なくとも自分が誰であるのか、迷子にならないで済むのではないか。

押し寄せる思念を心の内に感じながら、温かなドラムドルジさん一家に別れを告げ、更なる旅路へと着く。

■ ゲルでの生活、そして遊牧：8月17日～8月22日

新たに私たちを迎えてくれたのは、シャグダルさんとシュレーさん夫婦だった。シャグダルさんはよく冗談を飛ばし、シュレーさんはそれに常に笑い声を上げるような、賑やかな2人である。彼らの車に乗って、これまでの人生にないほどの縦揺れと横揺れを経験しながら平野を駆け抜け、壮麗な山嶺へと登っていく。標高約2500メートル地点にある彼らのゲルに到着した時には、見上げた夜空に無数の星が瞬いていた。

翌日、ゲルで初めての朝を迎えると、昨夜は夜陰に隠れていた周囲の景色が、透明度の高い紺碧の空の下に広がっていた。ゲルが位置する谷間を両側から見下ろすような山の急斜面に、その間から覗く遠くの荒原。ゲルの裏手の地はささやかな緑に覆われて、空の青、丘陵の茶とともに複雑な景観を織りなしていた。ヤギや羊たちが、切り立つような斜面の上を悠々と闊歩する。映画の映像でも彼らが斜面を歩く姿を見ていたが、実際に斜面の勾配を目にすると、映像の比ではない。どうやったらあんな急な傾斜の、しかもかなりの高所に行けるのだろうかと驚嘆していると、シュレーさんが乳搾りをしにバケツを持ってスルスルと斜面を登って行った。自分も頑張って後ろに着いていく。ただ登っていくだけなのに色々なことに気付かされる。普段、舗装された平坦な道ばかり歩いている時には少しも考えたことなどないが、ここでは自分でしっかりと足場を見極めないと危うく滑り落ちそうになる。何処が安全か、安全そうに見えても実は危ない足場はどれか、そして目的の場所に辿り着くために最も効率よく行ける行き方はどれか。頭で考えるだけでなく、身体感覚も重要になってくる。斜面の表面を観察して、ルートを組み立てて、そして身体感覚を頼りに実際に歩みを進める。ウランバートルでザヤーさんが言っていた言葉を思い出す。生活そのものが学びだと。この大地で生きてき

た人たちは、彼らを取り巻く自然環境がどんなものであれ、日々の生活の中で絶えず自分の感覚を元に、自分自身で判断を下すという習慣を培ってきたのだろうか。それは紛れもなく、生活から学ぶということなのではないか。

屋下がり、1人の青年が馬に乗ってゲルにやってきた。シャグダルさんの息子、トゥグルドウルさんである。シュレーさんが取り出した羊やラクダなどの皮を使って、ゲルの中で馬の鞍を作り始めた。少ない道具を頼りに、皮をなめしていく。手元にあるものだけでなく、ゲルの骨組みやベッドの脚までも道具にし、全身を使って無駄なくスイスイと作り上げていく。先ほど、私の日本での生活は利便性の極みだといった。便利なもので溢れて効率化が促されていると。しかし、そうではないのだとふと思った。ここでは、必要最低限のものであらゆることを行える。行えるというよりは、そうするために自分で頭と身体を使って、探し出していく。だからその行動と思考回路に無駄がない。そしてこの上なく合理的で効率的なのである。便利なものに頼らないと効率化は図れないという思いこみをしていたことに気がつく。身の回りのことのほとんどは、最低限の道具と自分の身体、そして工夫する頭でなんとかなる。ものに満たされた生活をしていると、ものがなくては不便なのではないか、と考えてしまいそうになるが、そうではないのだろう。その生き方が、生活が理にかなっているからそもそもものを必要としないのではないか。そもそも、物で溢れている生活が優れていて当然だと考えること自体が大いに傲慢なことなのだろう。ふと頭の中に二つの姿を思い浮かべる。一つは、ゲルで馬の鞍を作っていた青年の姿。もう一つは、教室に入って十数年もの間ひたすら黒板と机に向かい続けてきた私たちの姿。どちらの生き方が正しいとか、優れているかとかそういった話ではないが、世の中を生き抜いていく力がどちらにあるかと言われると、答えは明白な気がする。自分の暮らしと前提としていたことが相対化される心地よさに酔いしれ、明日はどんな風景と出会いが待ち受けているのか、密かに期待が膨らむ。

そして明るく朝、今日もまた目に痛いほどに澄み切った青空のもと、1日が始まった。本日は近隣のゲル回りへ。3つほどのゲルを回ったが、その中にはシュレーさんの兄であるガナーさんのゲルもあった。ガナーさんは私をバイクの後ろに乗せて、道なき道を縦横無尽に走りながら、自身の箱庭(といってもかなりの広範囲にわたるが)をガイドツアーしてくれた。見渡す限り続く峻厳な山脈と、鈍く光る陽光。厳しくも大地を吹きつける風の唸り声以外、聞こえるものは何もない。さまざまな環境問題が深刻化する今、人間が自然を侵し、両者の関係は切っても切り離せないというが、ここに来るとそういう感覚は消え去りそうになる。人間と自然を同列に並べるなんて、いささかおこがましいのではないかという思念が湧いて出てくる。この揺らがない天地自然が存在して、そこに築き上げた人間社会は、ほんの仮住まいでしかないのではないか。いつまでもこの悠久の場所に留まっていきたいと願いつつ、後ろ髪を引かれる思いでそこを後にした。ガナーさんのゲルに戻ると、デールを取り出して私に着せてくれ、さらには馬にまで乗せてくれた。補助つきながらも馬に乗って少し動いてみると、周りの人々は歓声を上げて喜んでくれる。つられて自分も満面に喜色の笑みを浮かべた。賑やかで温かな経験を後に、その後も数日をかけてさまざまな家族を回っていく。雲が大地に肉薄し、その影の黒と緑のコントラストが美しい荒原にただずむ小さなゲル、山の麓に並ぶバラックの小屋、低い砂の段に囲まれた空間に鎮座するゲルとバンなど。途中、幾度も親が留守で、子供だけがゲルの切り盛りをしているのを見かけた。なんの指示がなくともスーテーツァイを出し、テキパキと客人をもてなす。映画で見た子供達の姿と重なった。自分が今何をすべきなのかきちんと理解している様子を見ている

と、思わずハッと、自分の行動を省みたくなった。すべきことを見つけて自分から行動を起こすということは、誰にでもできるように見えて実はそうではない。いわゆる「指示待ち人間」なるものになってしまうのである。常に、誰かに指示を仰いでひたすら待つ。それは自分が何をしたらいいかわからないという言い訳と、責任を負うことの恐れ、そして誰かが何かしてくれるだろうという他力本願に依存した思考の停止からくるものでもある。だが、責任を負わない人生が果たして何になるだろうか。楽なことばかりを選んで思考停止することは、それは本当に「楽なこと」なのか。他人の指示通りに動いた果てに、「自分自身」には何が残るのか。思考はぐるぐると巡る。そうこうするうちに、気がつけばゲル生活の終わりが段々と近づいてきた。

激しい風雨がゲルを襲った次の日、とうとう秋が到来した。かなり冷え込みが激しく、朝などは歯の根が合わないほどだ。霧か霏に見紛うような乳白色の雲が、風に吹き飛ばされて次から次へと視界から消えていく。大きな白雲が、すぐ側の丘陵の斜面を這うように流れてきた。日本では見上げることしかできなかった雲と大空が、すぐそこに存在している。遠くに目を遣ると、谷間から覗く荒原に雲の陰が映り込み、大地がまだら模様を描いていた。翌日には秋営地へと移動するため、ここの自然とも間もなくお別れである。数にして1週間にも満たない短い期間であったのに、不思議と私の内を流れる時間はゆっくりで、まるで1ヶ月も滞在していたかのように感じた。それはきっと、煩わされるものが少なかったからであろう。インターネットも繋がらない自然豊かなこの場所にいると、他人との関係や世間体といったものは意識の中から淘汰され、思考は自ずと自分の内へと向かう。日本で生活していた時、どうしても世間が、他人が、といった基準で物事を考えてしまうことが多かった。しかし、ここに暫くいると、自分は何がしたいのか、自分は何をすべきなのか、といった「自分」に視点が向くようになってきた。それは決して自己中心的になることを意味しない。自身の「軸」は何なのか、ということを考えるようになったのだと思う。物の豊かさの代わりに、内側の豊かさがゆっくりと広がっていく感触がする。

厳しくも美しい秋晴れの1日は矢の如く過ぎ去り、秋営地に移動してわずかに一夜を過ごした後、とうとうこの荘厳で雄大な場所とも別れを告げることとなった。旅もいよいよ終盤、映画の主だった登場人物であるツェンゲルさんとバドローシさんの元へ向かう。

■ ツェンゲルさんとバドローシさん：8月22日～8月25日

ボグド郡中心地、シャグダルさんとシュレーさんの定住地で1日お世話になった後、いよいよツェンゲルさんとバドローシさんの住む地方都市へ。早朝6時半に出発し、濃く鮮やかに燃ゆる朝焼けの中、相乗りの車で進んでいく。街に着くと、バドローシさんがお知り合いの車で迎えにきてくれた。映画の中の面影を強く残している。明るくはっきりと、そして非常にテキパキとした喋りをする矍鑠とした人だ。住んでいるゲルに案内してくれると、ホッと一息するのも束の間、バドローシさんは仕事のために出て行ってしまった。現在は肉を切り捌く仕事をしているそう。とても体力の要る大変な仕事であろうが、そんなそぶりはおくびにも出さずに次々と仕事をこなしてゆく。それでいながら、私たちに向かって快活に喋りかけてもてなすことにも心を尽くしてくれる。彼女の身体には、エネルギーが満ち満ちて迸っているようだった。忙しなく行ったり来たりを繰り返しているのに、それがバタバタして見えないから不思議だ。お世話になった遊牧民の方がそうであったように、元々遊牧民の彼女

も、無駄がなく非常に効率的であるからだろう。そして夕飯には羊肉と野菜の炒め物、白ごはんには海苔のふりかけをご馳走してくれた。ちなみに炒め物の野菜は不格好ながら、私も剥くのを手伝ったものである。これがまたこの上なく美味しい。忙しい身でありながらこれほど素敵な手料理まで振舞ってくれることに、感謝で胸を打たれる。ここでもまた、ある思念がふと頭をよぎった。学校の友人と将来について話すとき、必ずと言っていいが、高収入を得て安泰で好きなことに浸れる生活がしたいということに行き着く。つまり、日々の忙しない労働から解放され、人生の余暇なるものを存分に手に入れたいということなのだ。そこは、お金とものと自由に満ち溢れた所なのだろう。しかし、その地位を手に入れたとて、果たして本当に自分は幸せなのか。己の幸せと人生を価値づけるのは、本当にそういった享樂なのか。勿論、自分は親の庇護のもとのうのうと暮らしている身であるから偉そうなことをきけた口ではない。だがしかし、人間を決めるものは、やはりその人の生き方そのものなのではないか。“幸せそうに見える”生活は人生の基幹を成し得ない。人生の主たるものは、その人の、人生に、そして今ある生活に対する姿勢なのではないか。バドローシさんの姿は、己が今できることに尽くしているが故に、これほどまでに力が漲り生き生きとしているように感じるのだろうか。映画の中で、大平原の上で生活していた時の環境とは全く異なるが、それでも映像で見た彼女と現在の彼女の姿はブレることがなかった。そうして映画の記憶と現在が交錯する感覚を味わいながら次の日を迎えると、その夜、とうとうツェンゲルさんが帰ってきた。映画ではまだほんの赤ん坊であったサンギ坊も今や立派な大人で“サンギさん”となっていた。バドローシさん、ツェンゲルさん、サンギさんの一家と先生と私で、賑やかに食卓を囲む。彼らは3年後、どうやらかつてのツェルゲル村があった場所に家族全員で行く予定らしい。願わくば、私もツェルゲルを抱いた大地をこの目に収めたいと、心の底から思うばかりである。気がつけば夜も更け、出発の日が近づいていた。

■ 再びウランバートルへ、及び帰国：8月25日～27日、そして現在

26日朝、バドローシさんとツェンゲルさんに車を出してもらって、ウランバートルへ向かうバス停に到着。どんな場所で生きていても、その揺らがぬ軸、その人の本質とでもいうべきだろうか、そういったものを沁み沁みと胸の裡に感じながら、ついに別れの挨拶を告げた。首都への帰途、バスの上でさまざまな思いや思念が取り留めもなく脳内に浮上しては消え去ってゆく。ただぼんやりと、何かに思いを馳せることのできる心の余裕と思考のゆとりが生まれたことを嬉しく思った。来た時と同じように、刻一刻と移りゆく景色を眺め続ける。約12時間、ウランバートルの果てしなく続く渋滞を潜り抜けて、ついにツェンゲルさんの次女、ハンドさんの家に辿り着いた。ハンドさんは映画の中で最もよく目で追っていた人物である。当時、幼い少女であった彼女も、今は強い光をその眼差しに湛えた4児の母になっていた。彼女の家族たちは、今年生まれたばかりの女の子の双子を中心に回っているように見える。私が双子の愛らしさに目を奪われている間、先生や双子の赤ちゃんの相手をするハンドさんやつれあいさんに代わり、年上の子供たちが何も言われずとも後片付けをしたり、次のご飯の支度をしたりし始める。遊牧の地で見た子供達と同じように、自分のなすべきことを自分で見つけ、行動しているのだ。これは、ツェルゲルの雄大な大地を育ち生き抜いてきたハンドさんの賜物だろうか。思わず背筋が伸びる。残念ながら、彼女の家にはほんのわずか、1日だけ滞在するに留まった。3年後、ツェンゲルさんたちがツェルゲル村に行くときには、彼女の双子はどれほど成長しているだ

ろうか。若く活気に溢れた家ともここでお別れだ。

旅の最後は、モンゴルでの生活のスタート地点、ザヤーさんとツェネさんの家に舞い戻ってきた。もうすっかり馴染みになったもので、居間のソファに座って特に何をするでもなく、ゆったりとテレビを眺める。寂寥感もあれど、それを上回るほどの素敵な出会いの温かさと経験に、むしろ喜びの余韻が広がる。もう、思い残すことはない。それと同時に、この地に再び立つことを胸に誓った。

27日夜、私はついに日本の関西空港に帰還した。ここで、私のモンゴル周遊は終わりを告げる。だが、生活はまだまだ続く。そしてその中に、モンゴルの地での邂逅と経験は間違いなくゆったりと、しかしながら力強く息づいていくのだろう。

さいごに

日本に帰国して数ヶ月、ある授業で教授が私にこう尋ねた。「日本は豊かな生活水準を誇っているのに、なぜ幸せだと感じる人が少ないのでしょうか？あなたはどのように思いますか」と。私は咄嗟に答えた。「ものに満ち溢れて埋もれてしまっているからじゃないですか」と。そのとき私の脳裡をよぎったのは、紛れもなくモンゴルで暮らしたあの2週間のことである。物質的豊かさが、必ずしも社会や人間の豊かさを意味するわけではない。本当の豊かさとは何か。その問いの手がかりは、間違いなく人間そのものの裡に隠れているのであろう。周りの環境を観察し、洞察力を培うこと。これは人間社会や人間関係においても通用する力である。だが忘れてはいけないのは、ただ周りの状況を察知してそれに迎合するのではなくて、自分自身で判断を下すことだ。観察する身体と、判断を下す思考と。そして己の「軸」を培っていくこと。それは、日々の生活から学ぶことに他ならない。複雑化と多様化を極めていくこの動乱の世の中で、私はどう生きていきたいのか。どう在りたいのか。これは常に問い続けなければならないことだろう。でも日常に忙殺されるあまり、思考すること、心を動かすことを押し殺して忘れていた自分がいた。その心の鮮やかな動きを取り戻してくれたのは、モンゴルでの数々の出会いと、悠久の時を流れる自然の美しさである。最後に、このような素晴らしい機会を与えてくださった今岡良子先生、モンゴルでお世話になった方々、そしてモンゴルの地に、深く感謝申し上げる。

(そう よしこ)